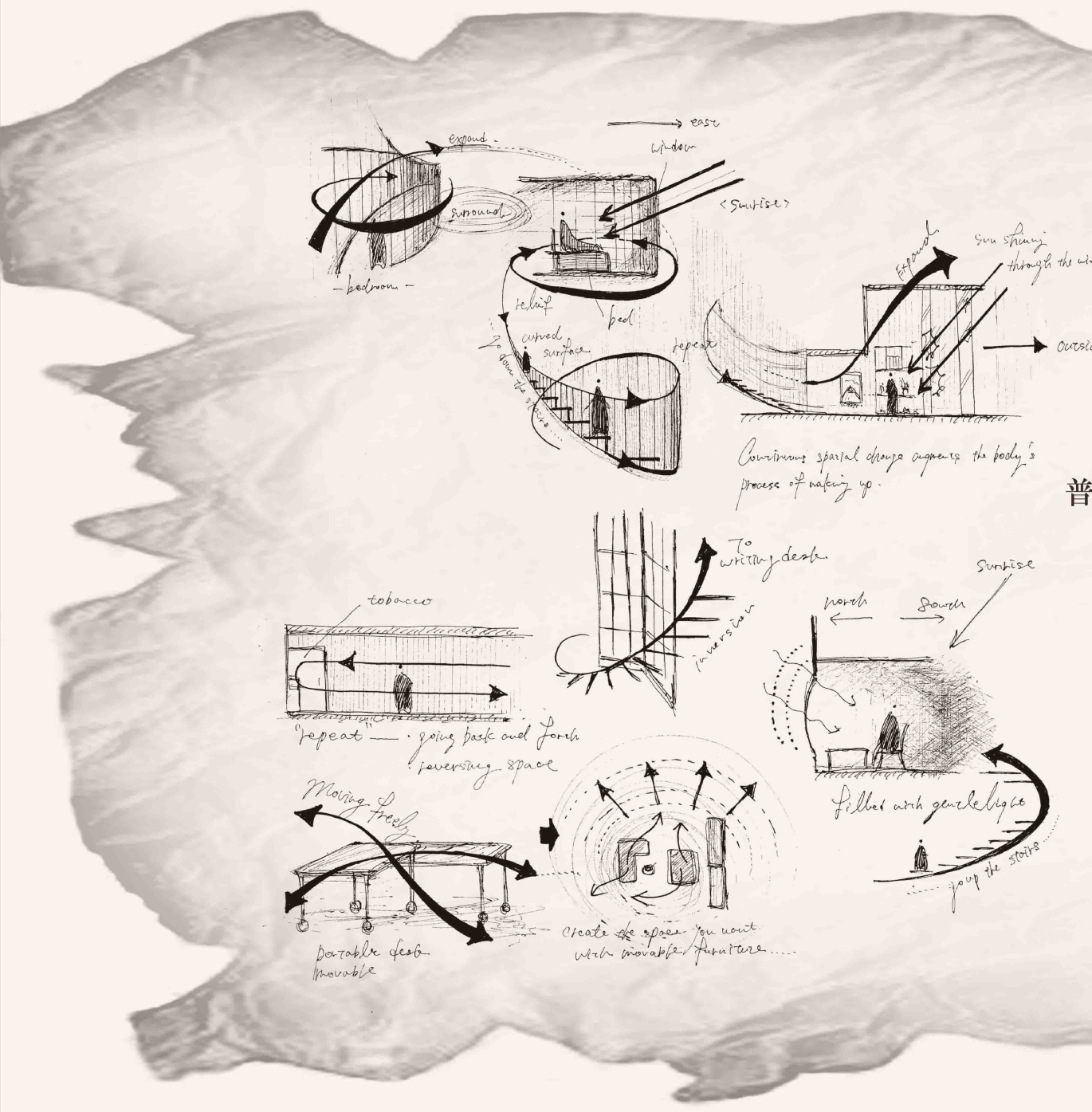


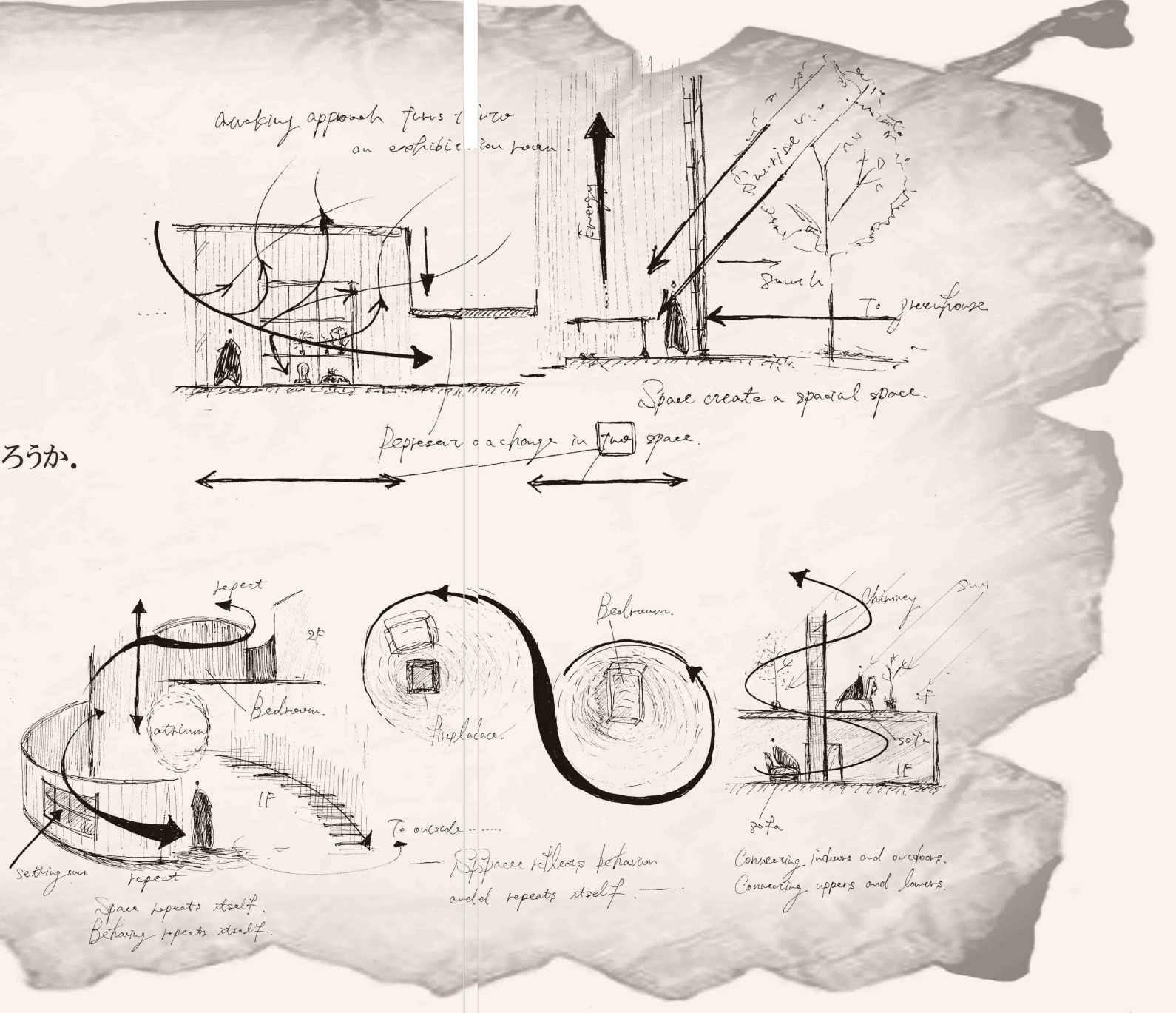
ふるまいの**進化論**

普段我々は，既に形態が規定された建築空間で様々なふるまいを行う．だがそれは我々を不自由にしていないだろうか．

「明るく柔らかい光が差し込むところで本を読みたい」
「隅っこの囲まれた感じの場所で眠りたい」

振り返ると，我々は〈ふるまい〉を起こすとき，いつも快適な〈空間〉を探していることに気づくだろう．
ならば建築も〈ふるまい〉から立ち上げてみてはどうだろうか

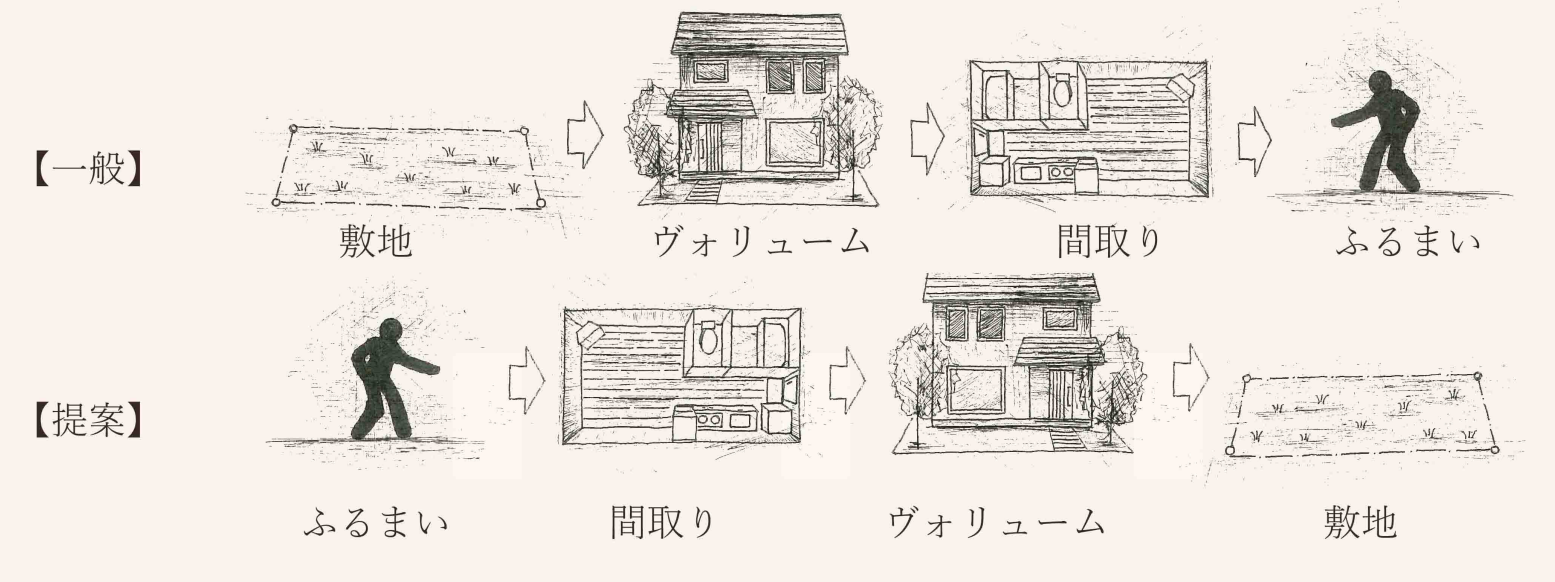
従来の建築手法を逆転させ，ふるまいから空間へ進化させる〈ふるまいの進化論〉



I Background

小さな〈ふるまい〉から生まれる創造性

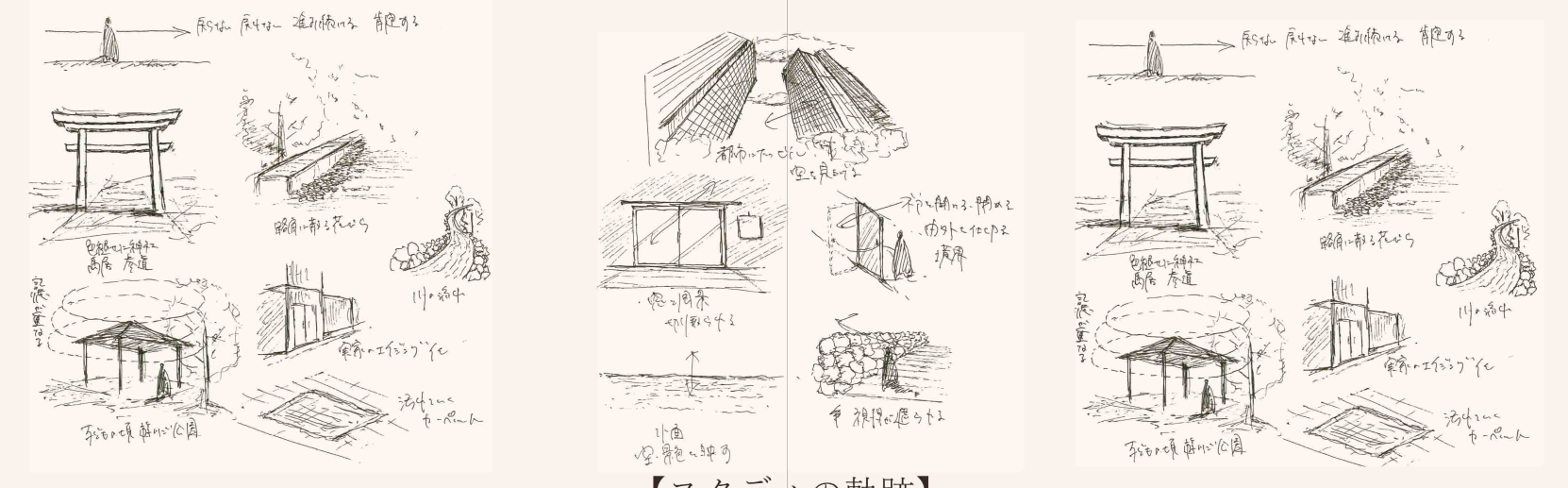
現代の住宅は 3LDK のような規格化されたものが多く，敷地→ヴォリューム→間取りの順に住宅が形成され，その中で行為〈ふるまい〉が行われる．しかし，この順番によって，われわれのふるまいは既存のヴォリュームや間取りに先行され，制限されてしまっている．
そこで，一般的な住宅の設計方法を逆転させてふるまいから空間を立ち上げることで，創造性を増強する住空間を再構成することを目指す．



II Process

ケーススタディ：Charles Robert Darwin（1809–1882）

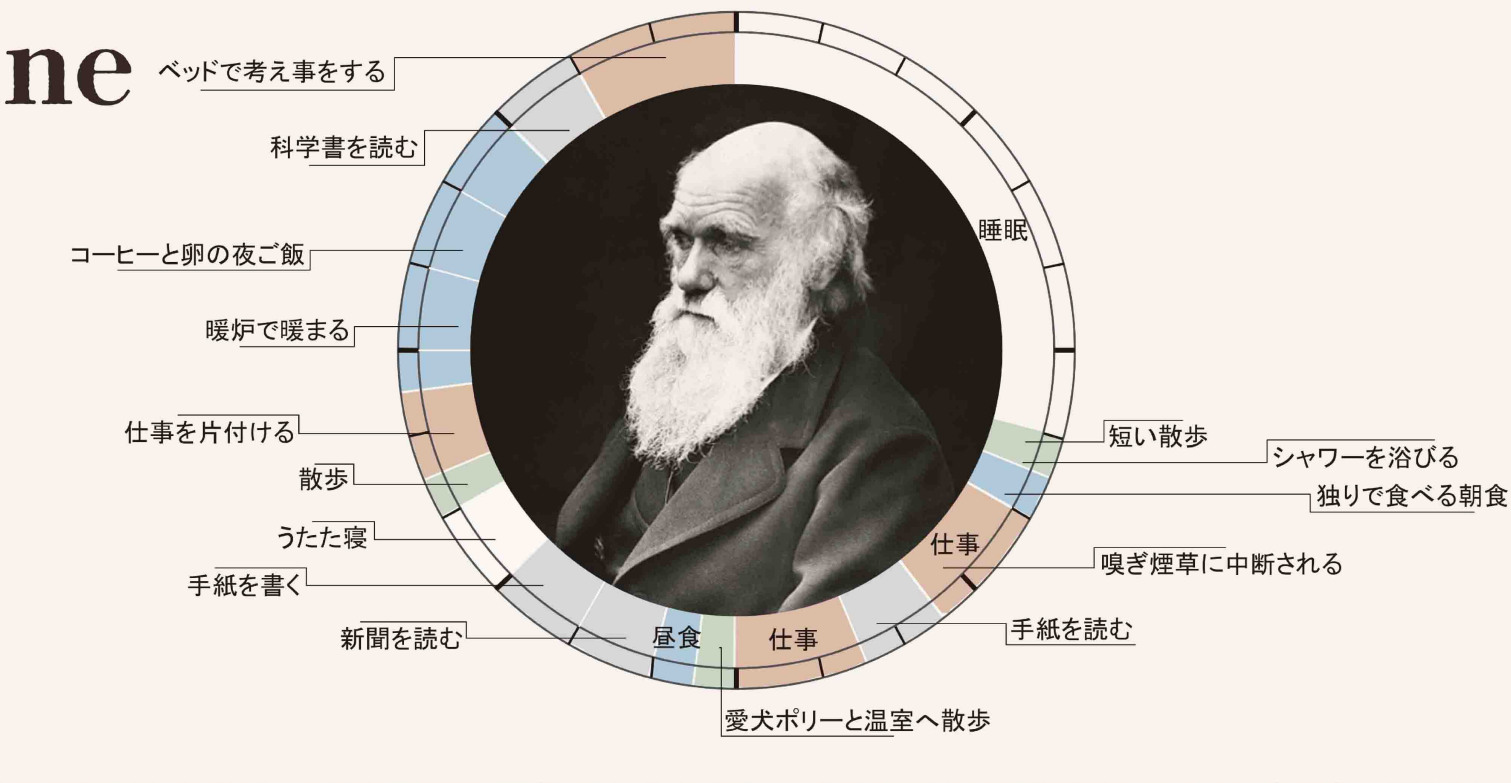
かつて天才とされた人を代表して，チャールズ・ダーウィン（1809~1882）を選び，一日のスケジュールを参考に住宅を構成する．ダーウィンの一日のルーティンからふるまいを抽出し，それらのふるまいの軌跡を拡張し創造の可能性を増強するような空間操作を考え，それらを連続的に繋げることで住宅を立ち上げる．
本提案はチャールズ・ダーウィンという一人のクリエイティブな天才を通して示す，〈ふるまい〉を〈空間〉へ進化させることで住宅を立ち上げる新たな設計手法のケーススタディである。



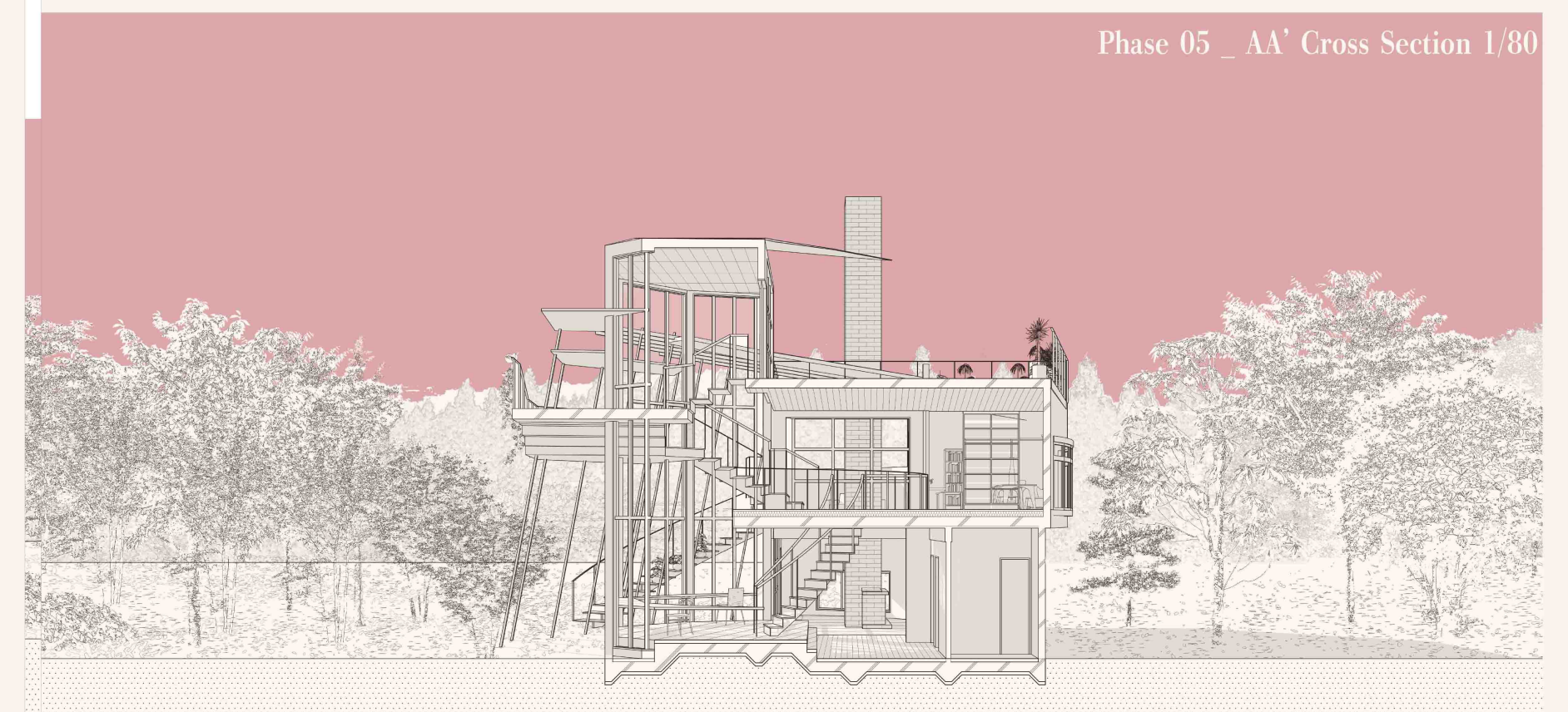
【スタディの軌跡】

III Darwin' s Routine

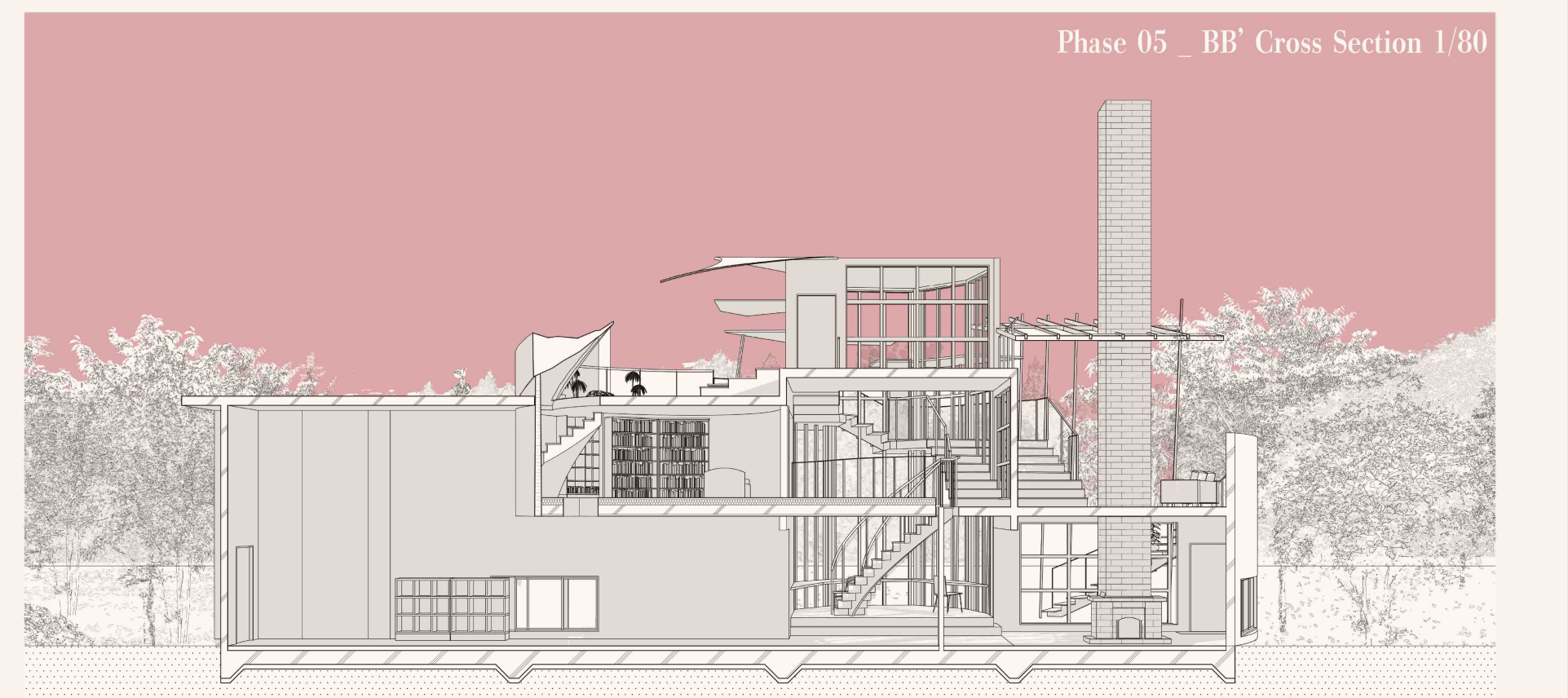
ダーウィンは 1842 年に郊外の住宅に引っ越してから，40 年間毎日同じ生活を続けた．そこで，《進化論》をはじめとする様々な大発見を成し遂げてきた．このような創造的な活動は，毎日繰り返す生活，つまり〈ふるまい〉にその可能性が潜在するはずである．散歩をする，読書をする，日々のあらゆるふるまいは，ダーウィンにおける《進化論》のような創造の可能性を秘めている．



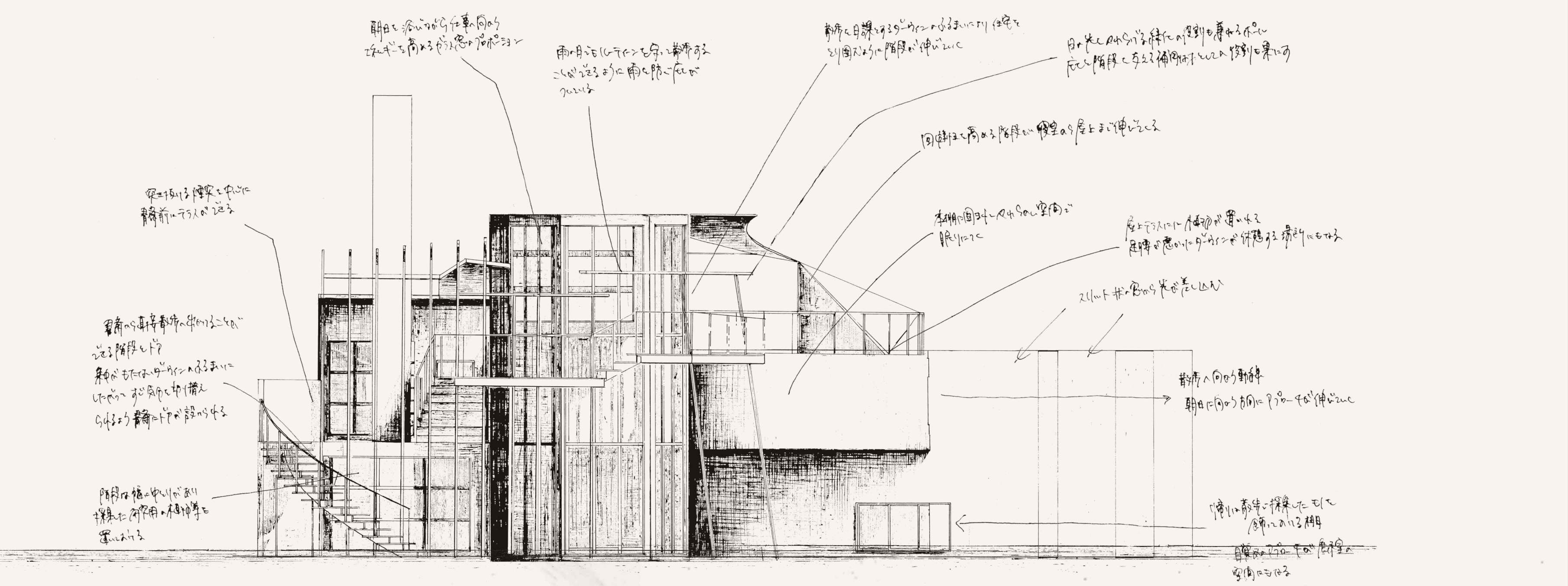
日々の小さなふるまいの跡から、空間がたちあがっていく



Phase 05 _ AA' Cross Section 1/80

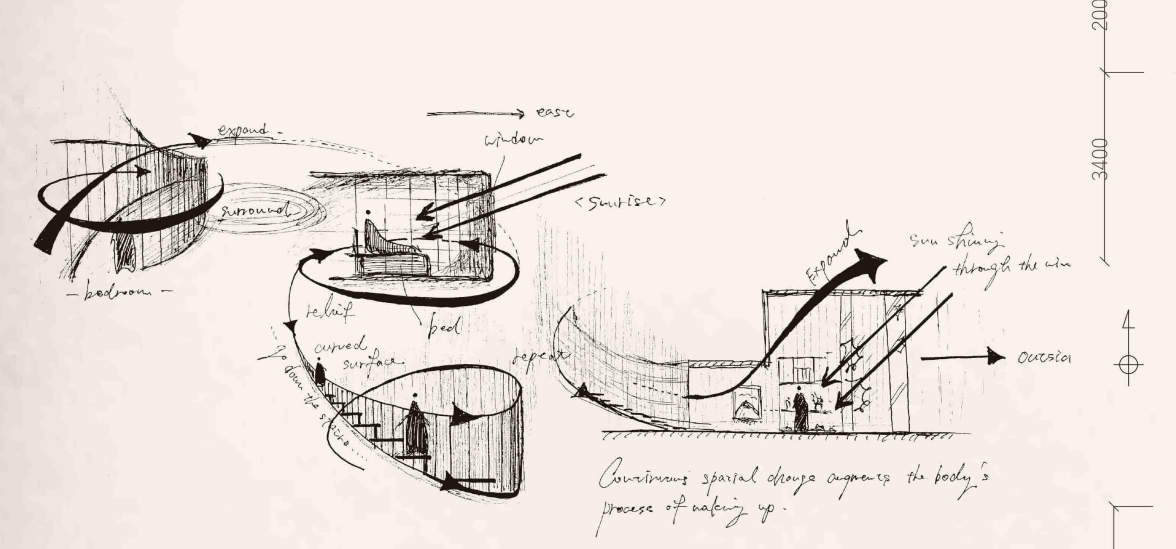


Phase 05 _ BB' Cross Section 1/80

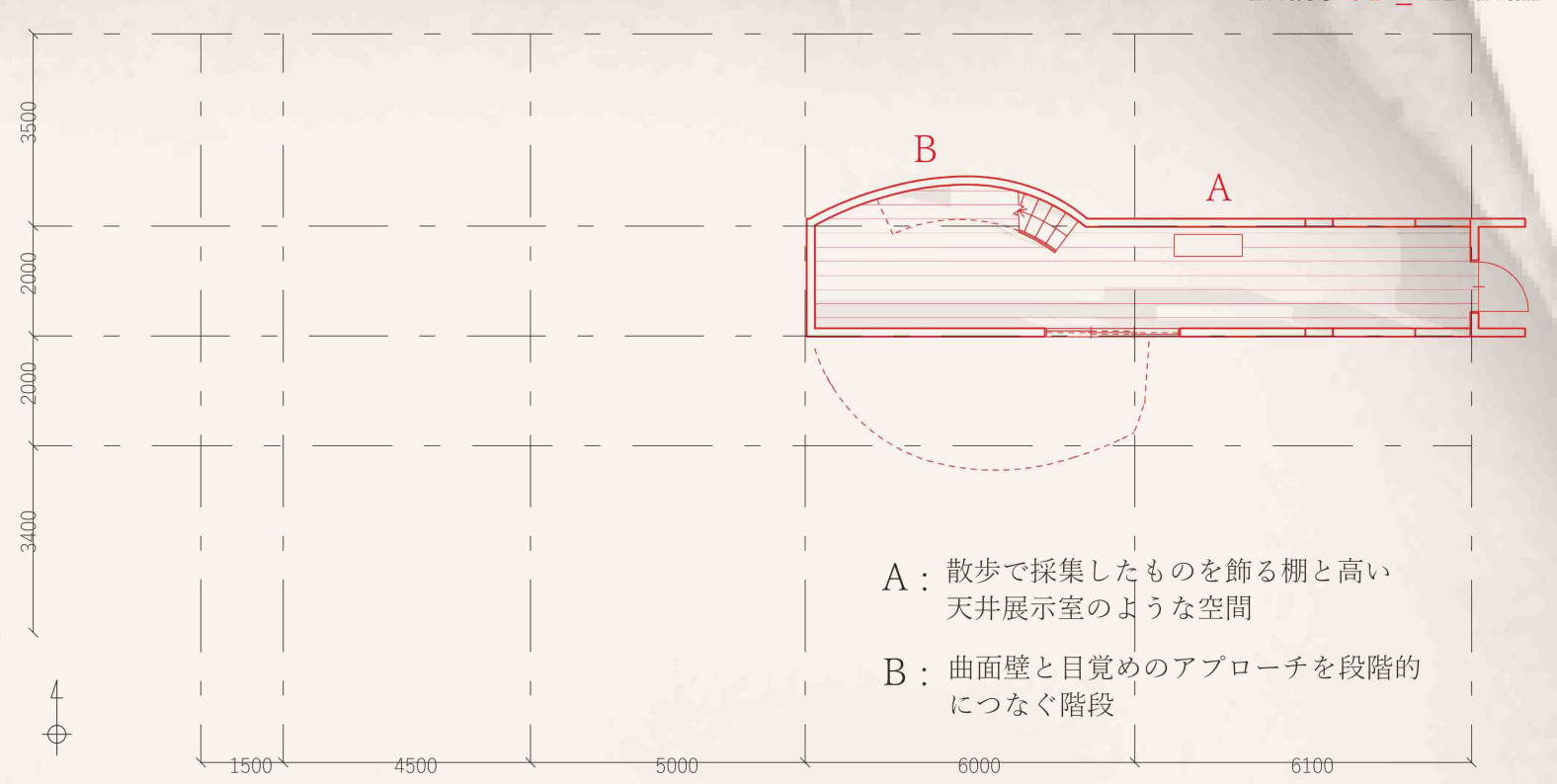


Phase 01

AM 7:00


east
window
bedroom
bed
Sunrise
Expand
Sun shining through the window
outside
Continuous spatial change augments the body's process of waking up.

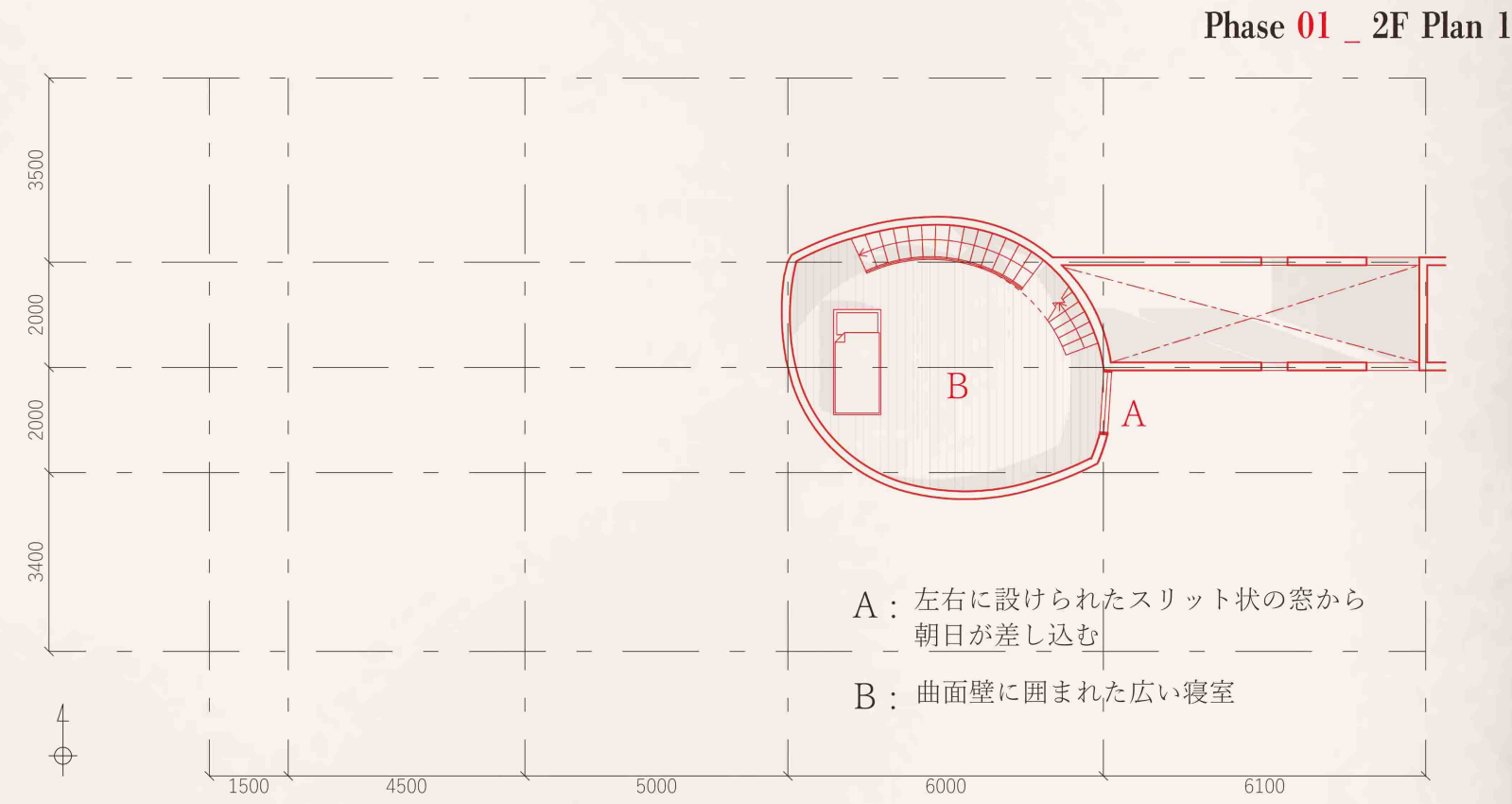
身体の休息は有機的な曲面から得られる．広い寝室を好んだダーウィンは，曲面壁に囲まれた広い寝室の窓から入る朝日を浴びながら起床し，そのまま朝の散歩に向かう．ダーウィンの一日のルーティンは朝 7 時の短い散歩から始まる．朝日の入る東へ伸びるアプローチは徐々に高い天井高になって開けてゆき，通路の両側に設けられた開口から光の筋が差し込むことで段階的に切り替える様相を表す．連続的な空間変化は徐々に身体が起きていく過程を増強していく．



Phase 01 _ 1F Plan 1/80

A：散歩で採集したものを飾る棚と高い天井展示室のような空間

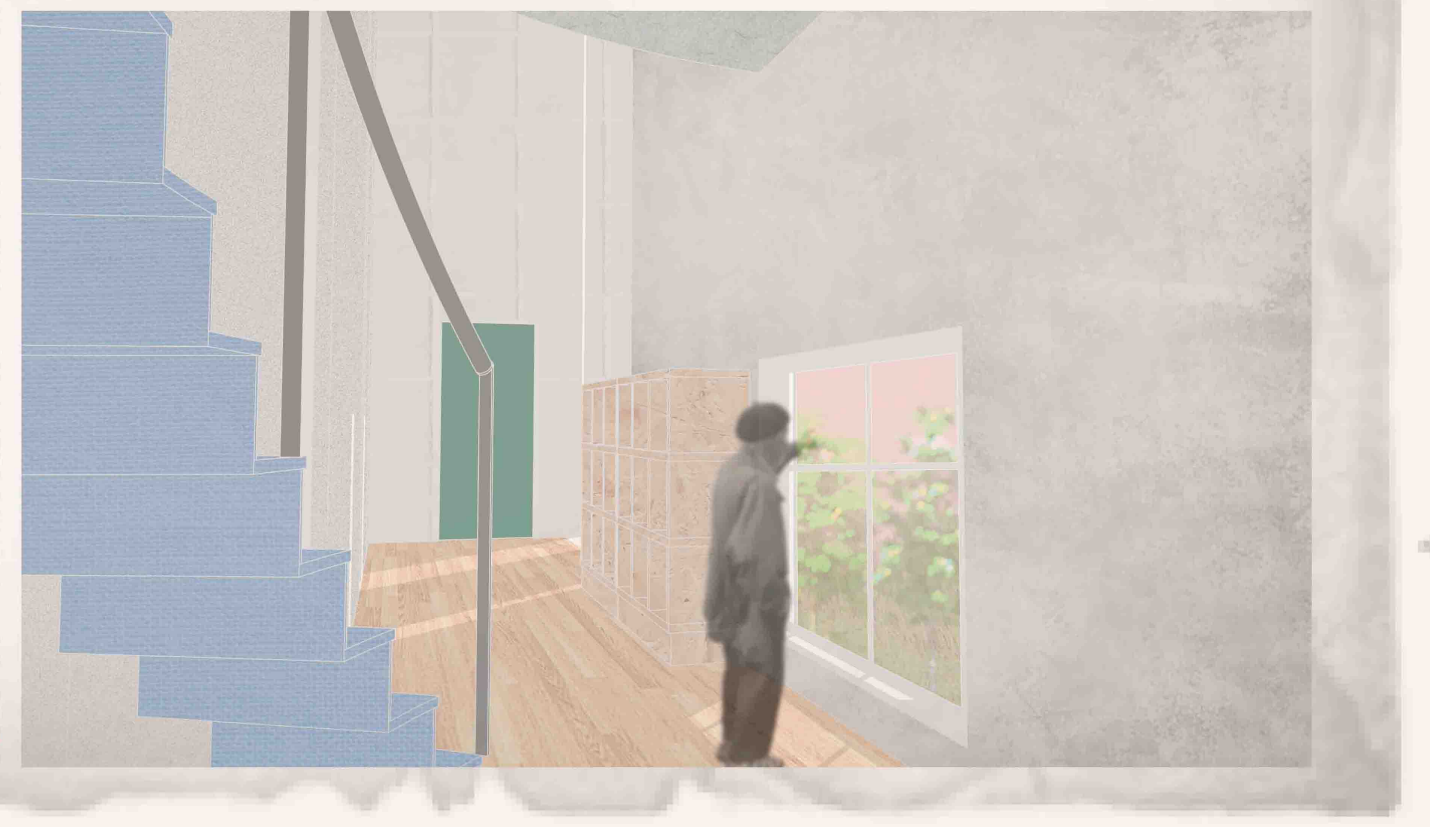
B：曲面壁と目覚めのアプローチを段階的につなぐ階段



Phase 01 _ 2F Plan 1/80

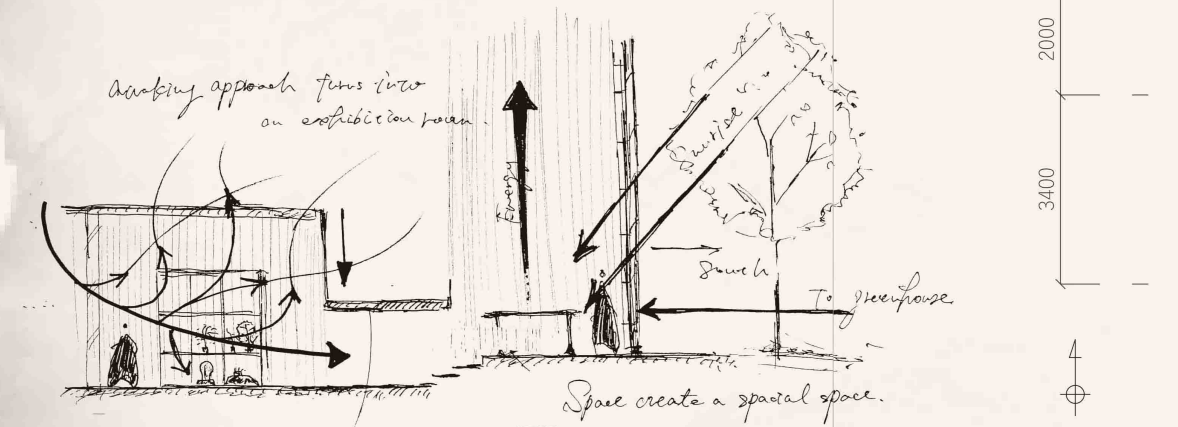
A：左右に設けられたスリット状の窓から朝日が差し込む

B：曲面壁に囲まれた広い寝室

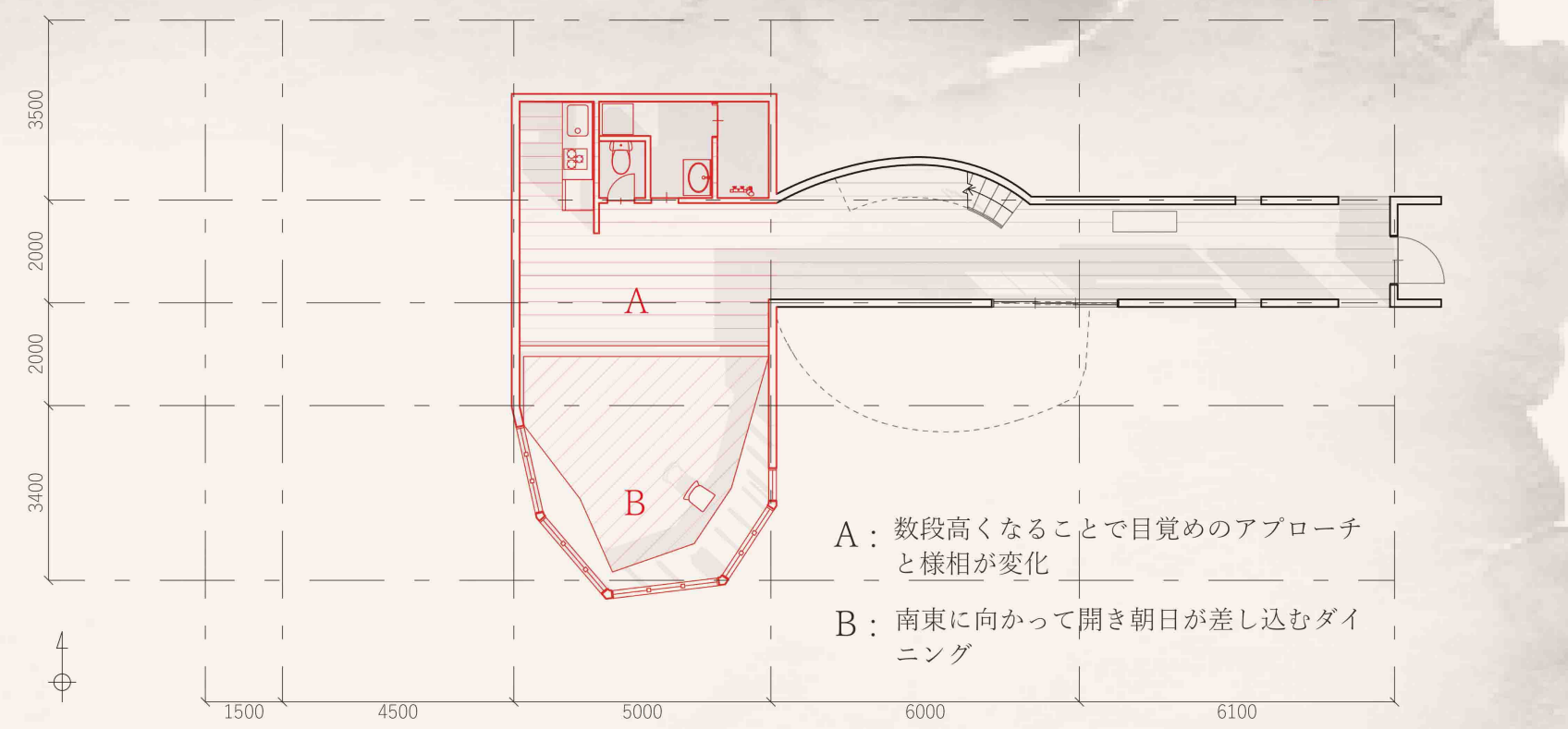


Phase 02

AM 9:00


awaking approach turns into an exhibition room
Space create a spatial space.
Represent a change in the space.
To greenhouse

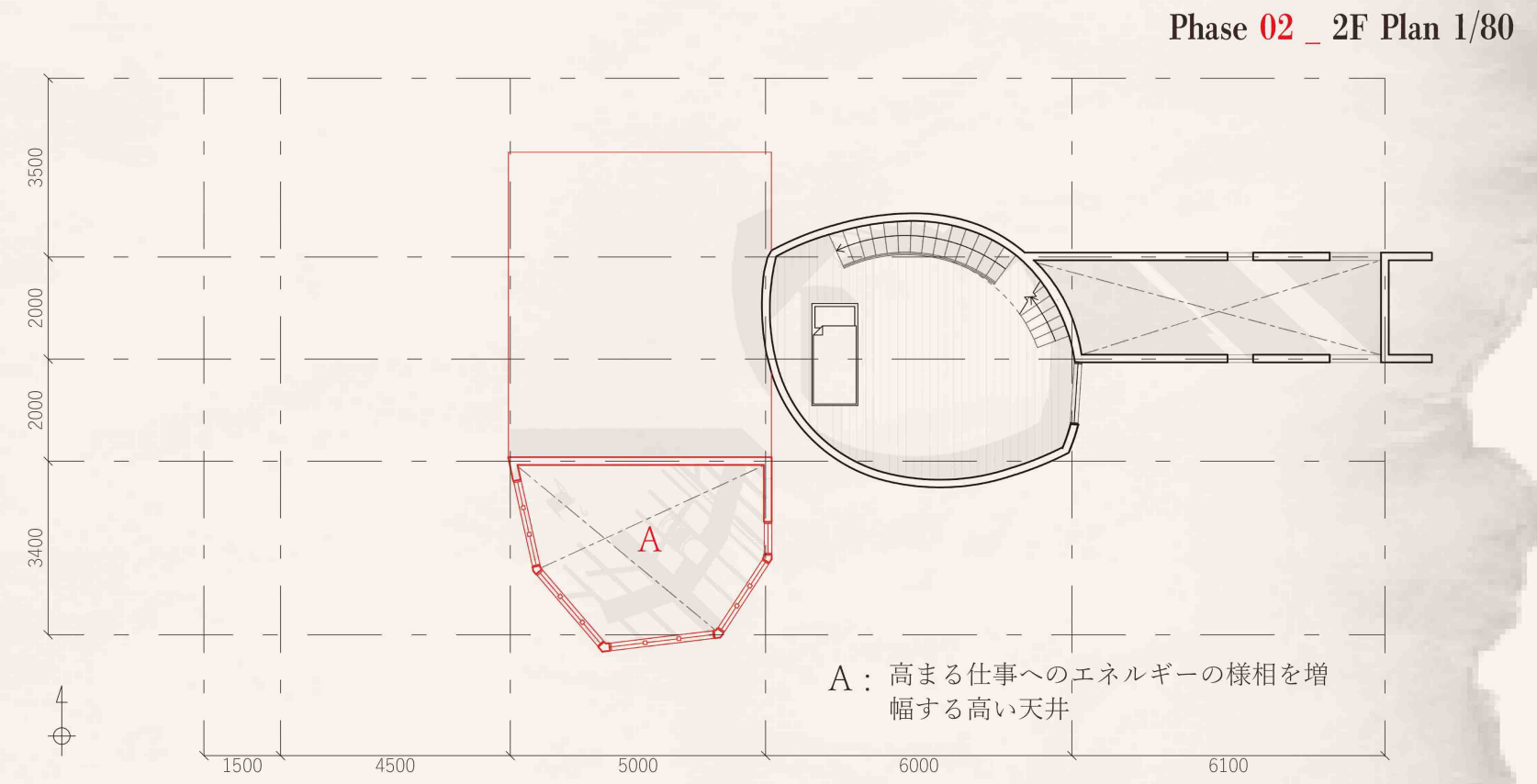
ダーウィンは朝の散歩で出会った植物やもの珍しい石等を，興味の向くままに採集する．目覚めのアプローチだった廊下は，高く開放的な天井と光が美しく差し込む空間をもって，採集したコレクションを展示する空間に変化する．散歩から帰ってきたダーウィンは，シャワーを浴びたのち朝食を摂る．午前中に集中して仕事に取り込むダーウィンにとって，朝食はその日の生産性を高め，精神を統一するため大切なものであった．
仕事へ向かうエネルギーを高めるダーウィンの様相に沿うように，ガラス張りの空間が朝日を取り込む南面に立ち上り，ダイニングを形成していく．



Phase 02 _ 1F Plan 1/80

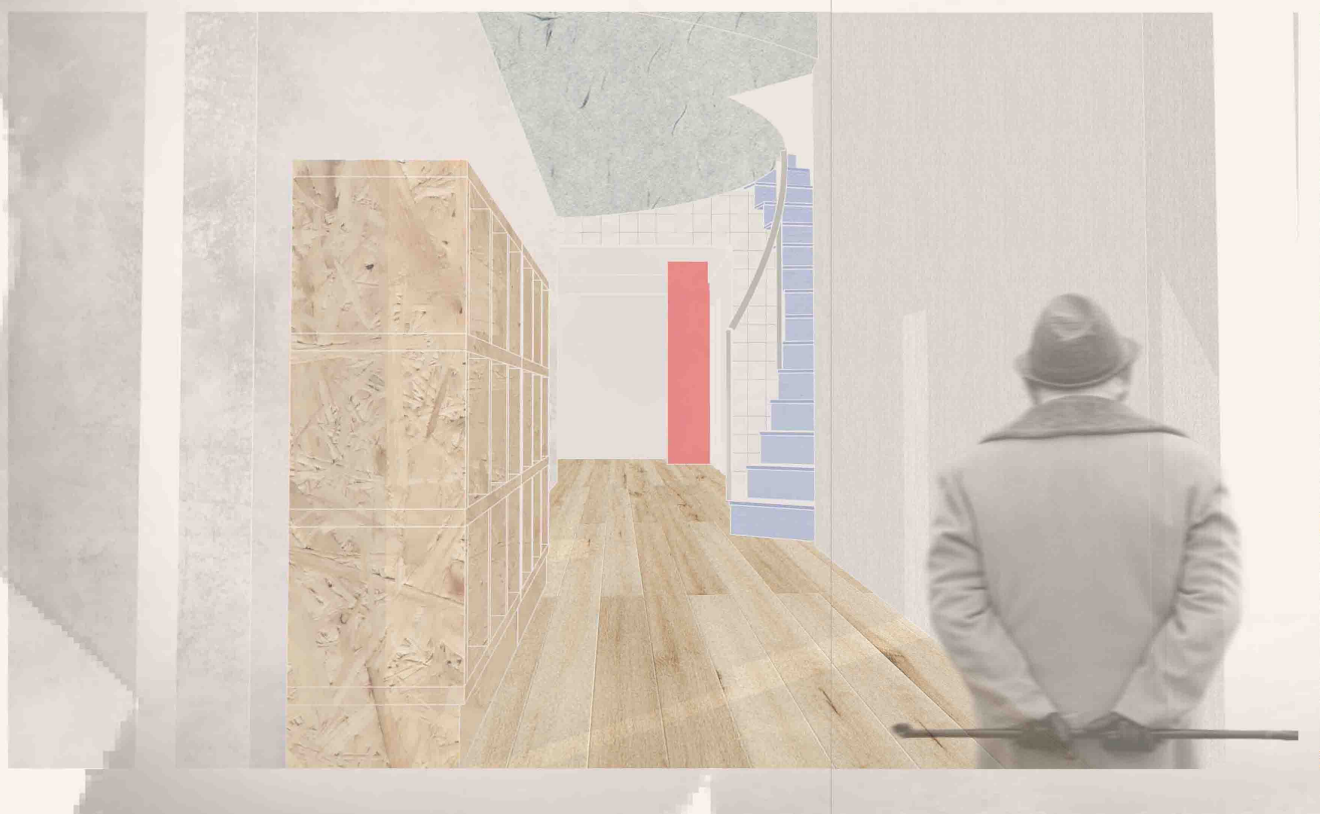
A：数段高くなることで目覚めのアプローチと様相が変化

B：南東に向かって開き朝日が差し込むダイニング



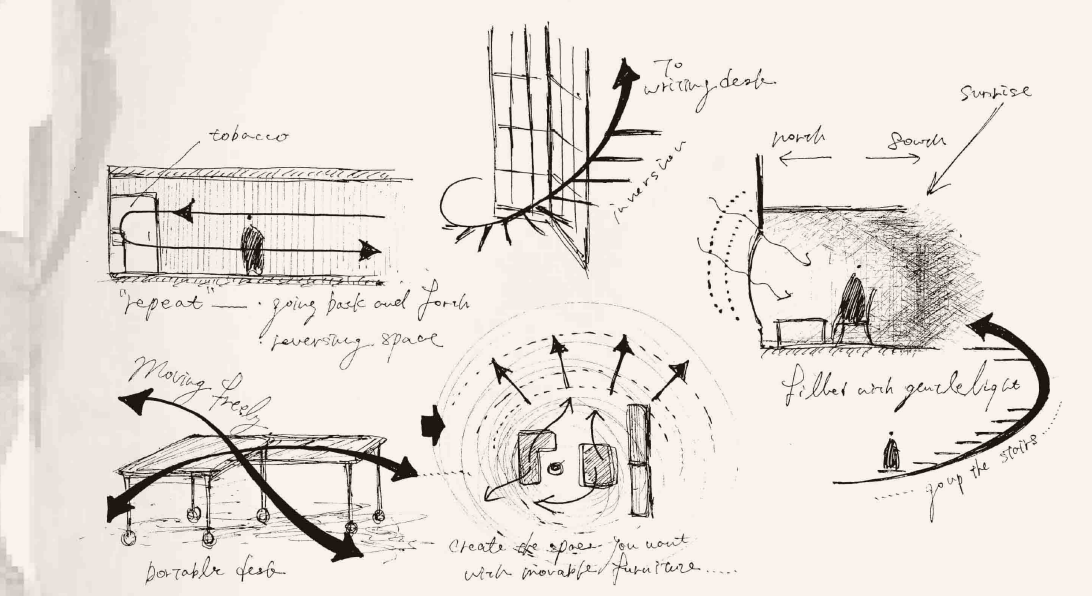
Phase 02 _ 2F Plan 1/80

A：高まる仕事へのエネルギーの様相を増幅する高い天井

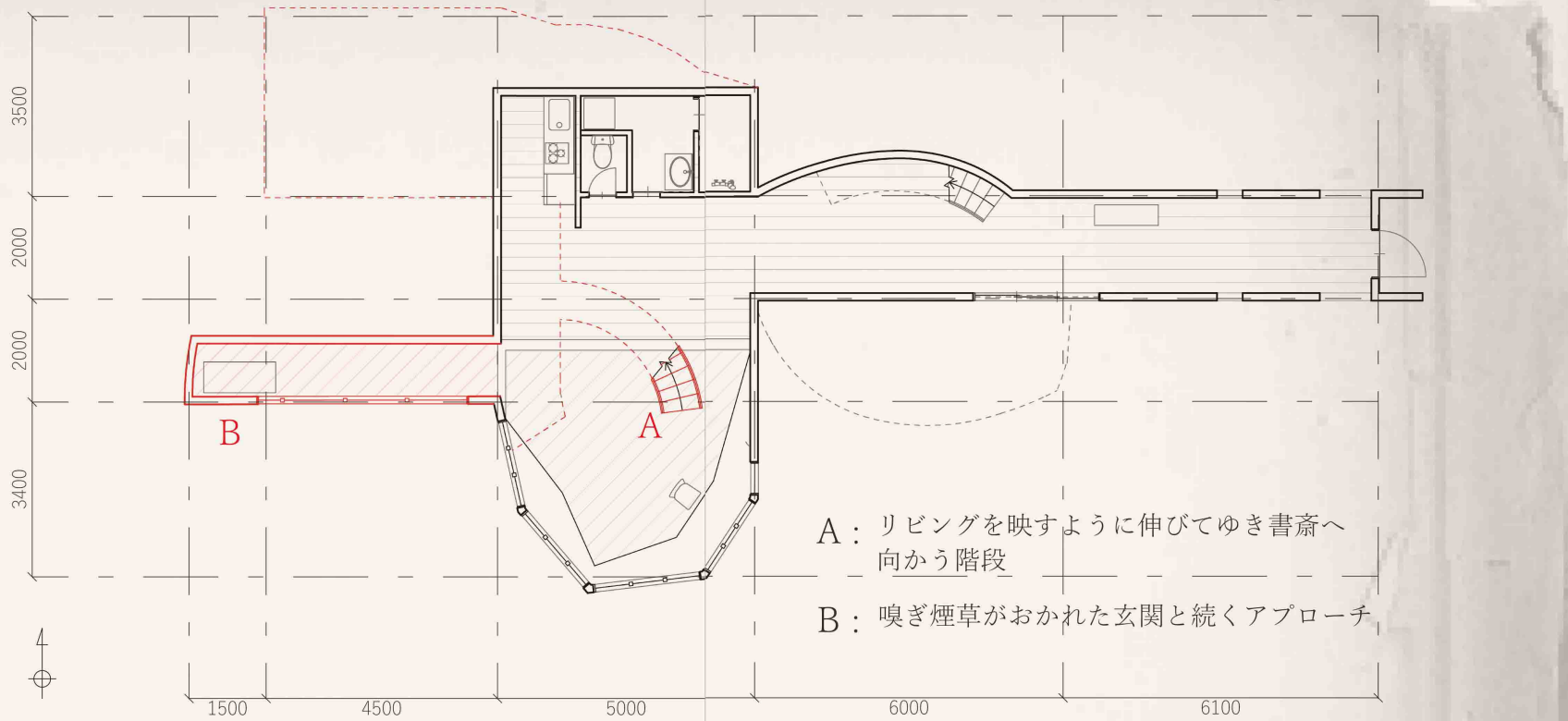


Phase 03

AM 12:00



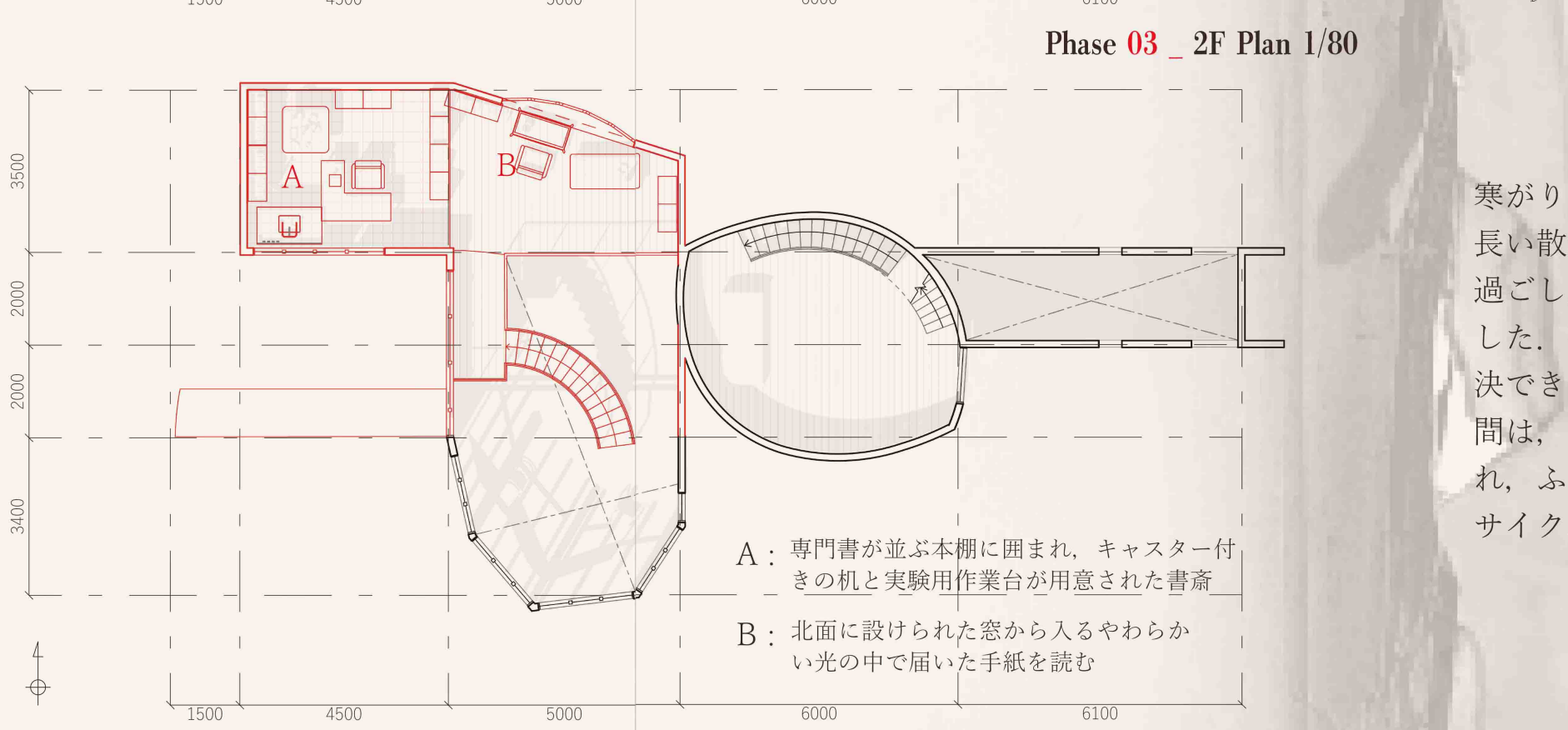
ダーウィンはたびたび嗅ぎ煙草に仕事を中断されたが，これは集中力がもたないダーウィンにとって必要不可欠なふるまいであった．仕事場からいったん離れ，玄関まで嗅ぎ煙草を嗅ぎに行き，同じ道を往復するというルーティンは不安定なダーウィンの精神を支え，集中して仕事に打ち込む活力を与えてくれた．
休憩後に移動した書斎は研究に集中できるよう一段レベルが下がるとともに本棚に囲まれ，物を出しっぱなしにするダーウィンのためにキャスター付きの大きなテーブルが備え付けられ，本棚，テーブル，実験用作業台に合わせて書斎の空間が決まっていく．



Phase 03 _ 1F Plan 1/80

A：リビングを映すように伸びてゆき書斎へ向かう階段

B：嗅ぎ煙草がおかれた玄関と続くアプローチ



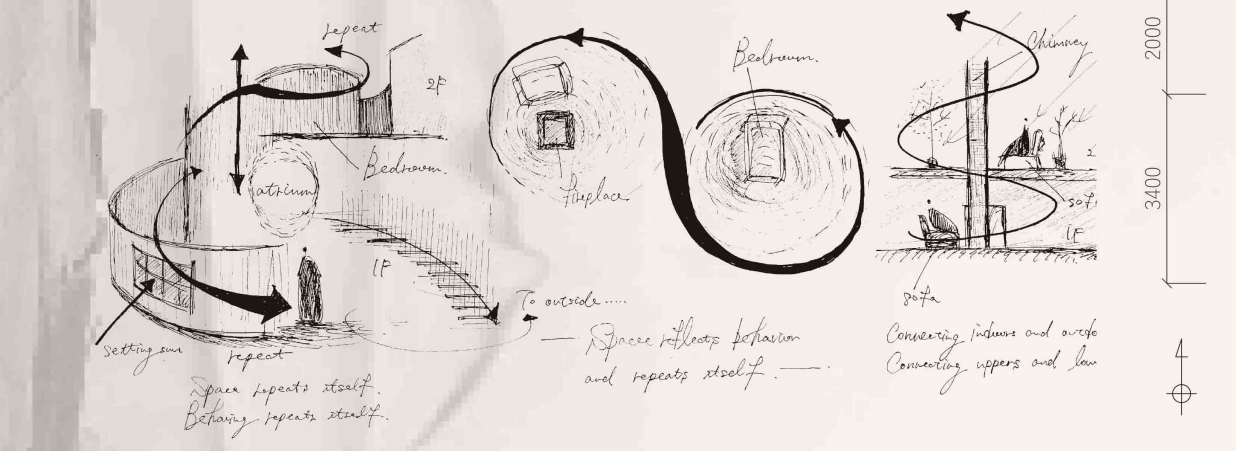
Phase 03 _ 2F Plan 1/80

A：専門書が並ぶ本棚に囲まれ，キャスター付きの机と実験用作業台が用意された書斎

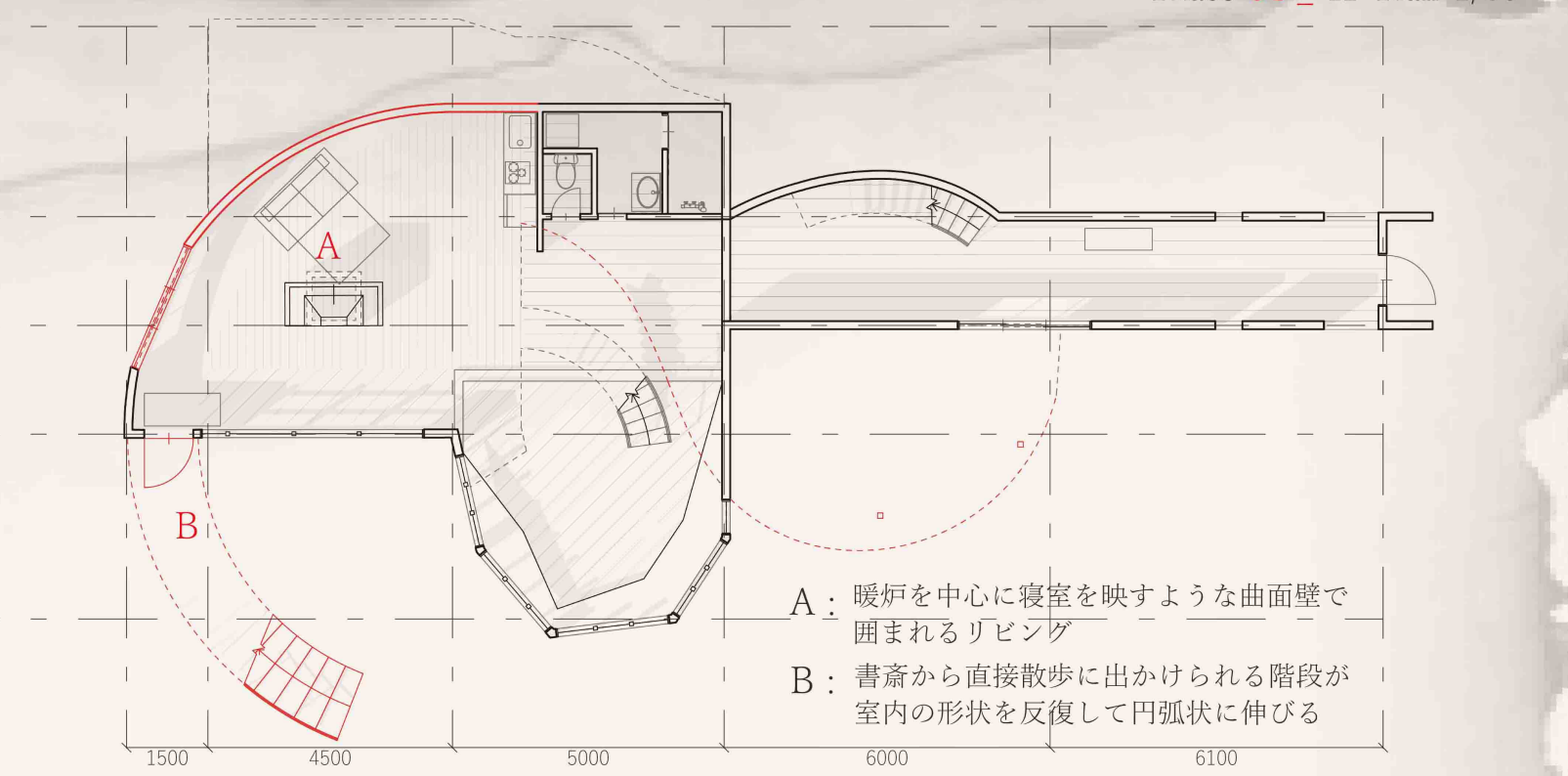
B：北面に設けられた窓から入るやわらかい光の中で届いた手紙を読む

Phase 04

PM 4:00



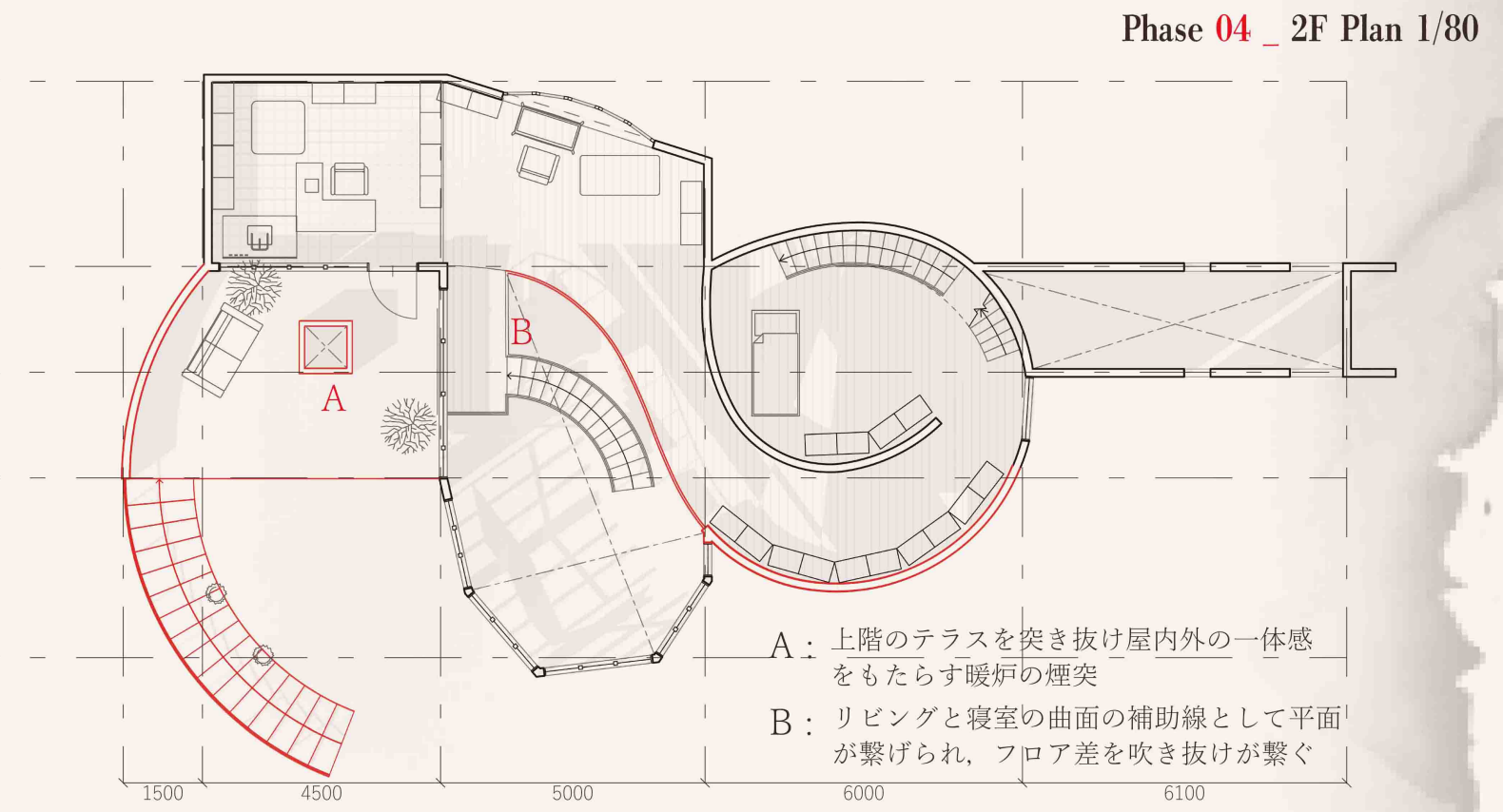
寒がりなダーウィンは午後は暖炉を中心に生活が広がる．長い散歩を終えた後は新聞を読んだり手紙を書いたりして過ごし，たびたび暖炉の近くに据えられたソファで寝落ちした．夜は寝つきが悪く，科学書を読みながらその日に解決できなかった問題をあれこれ考えた．寝室とその他の空間は，リビングと寝室における曲面の補助線的につなげられ，ふるまいにしたがって本棚が繋いでいく．一日の生活サイクルとともに空間がつながる．



Phase 04 _ 1F Plan 1/80

A：暖炉を中心に寝室を映すような曲面壁で囲まれるリビング

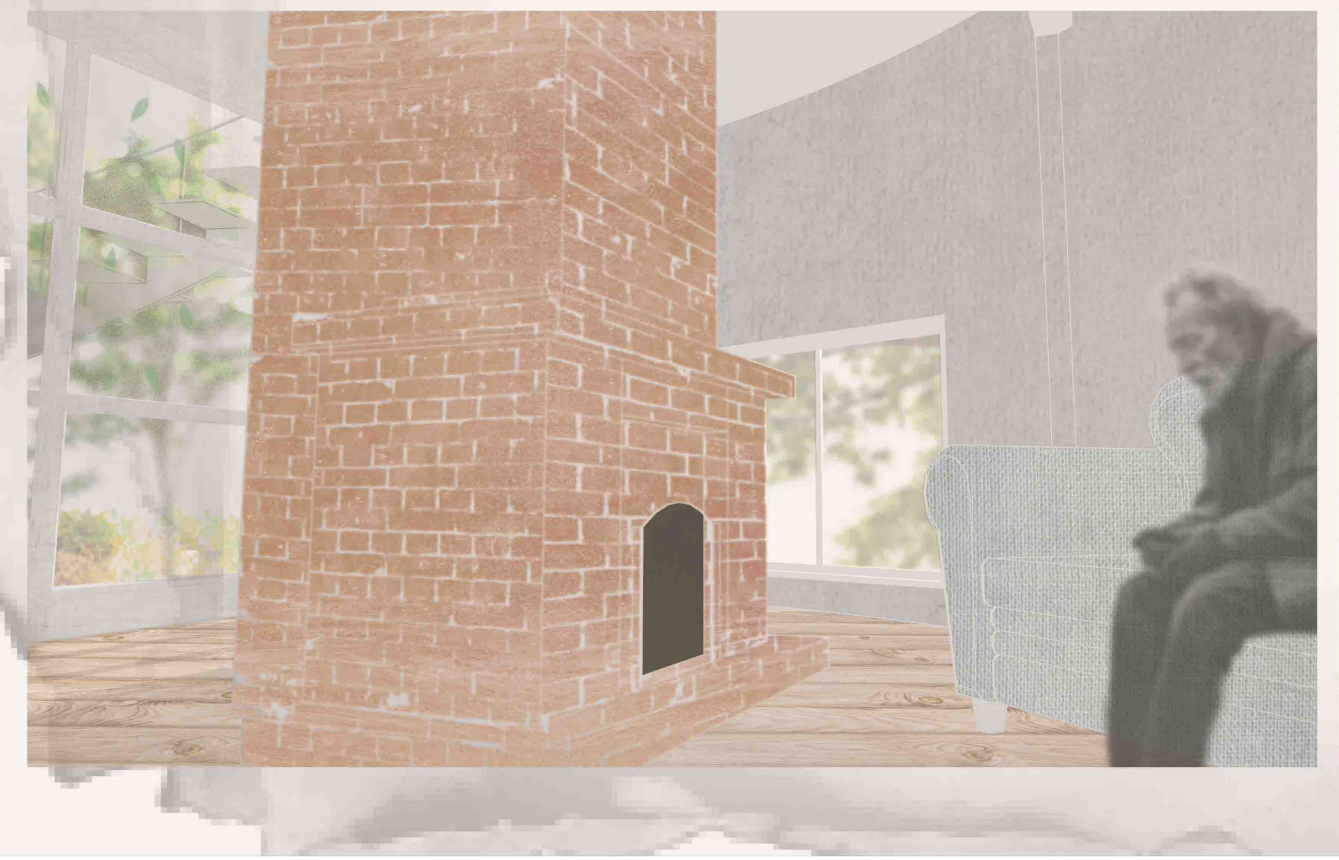
B：書斎から直接散歩に出かけられる階段が室内の形状を反復して円弧状に伸びる



Phase 04 _ 2F Plan 1/80

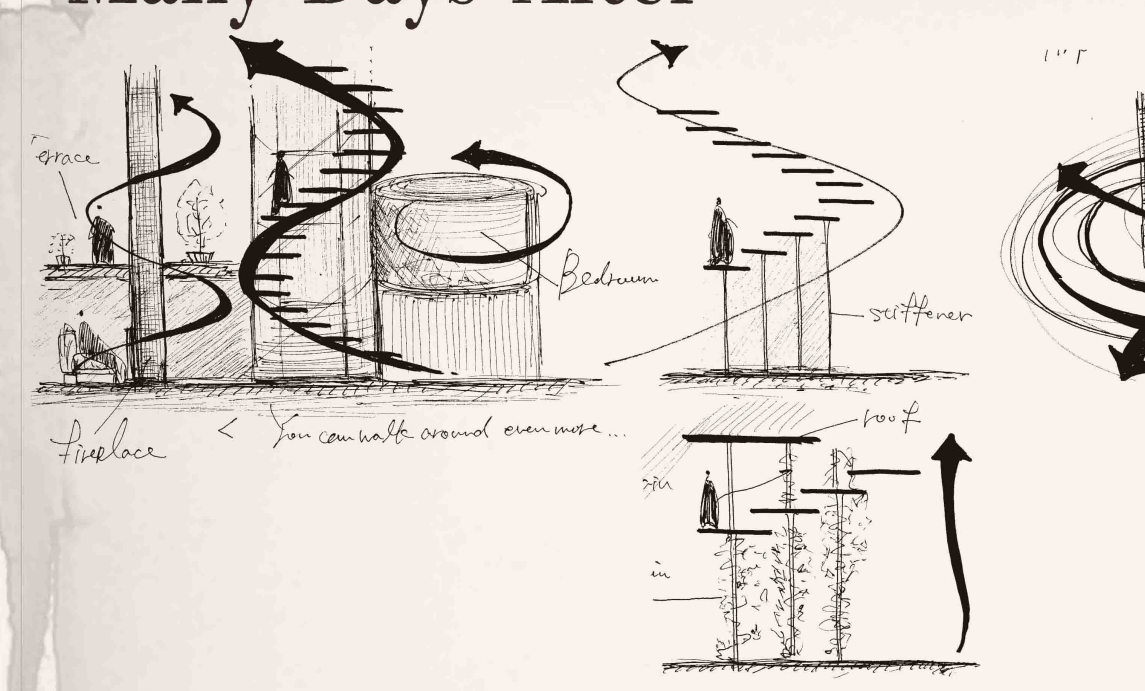
A：上階のテラスを突き抜け屋内外の一体感をもたらす暖炉の煙突

B：リビングと寝室の曲面の補助線として平面が繋げられ，フロア差を吹き抜けが繋ぐ



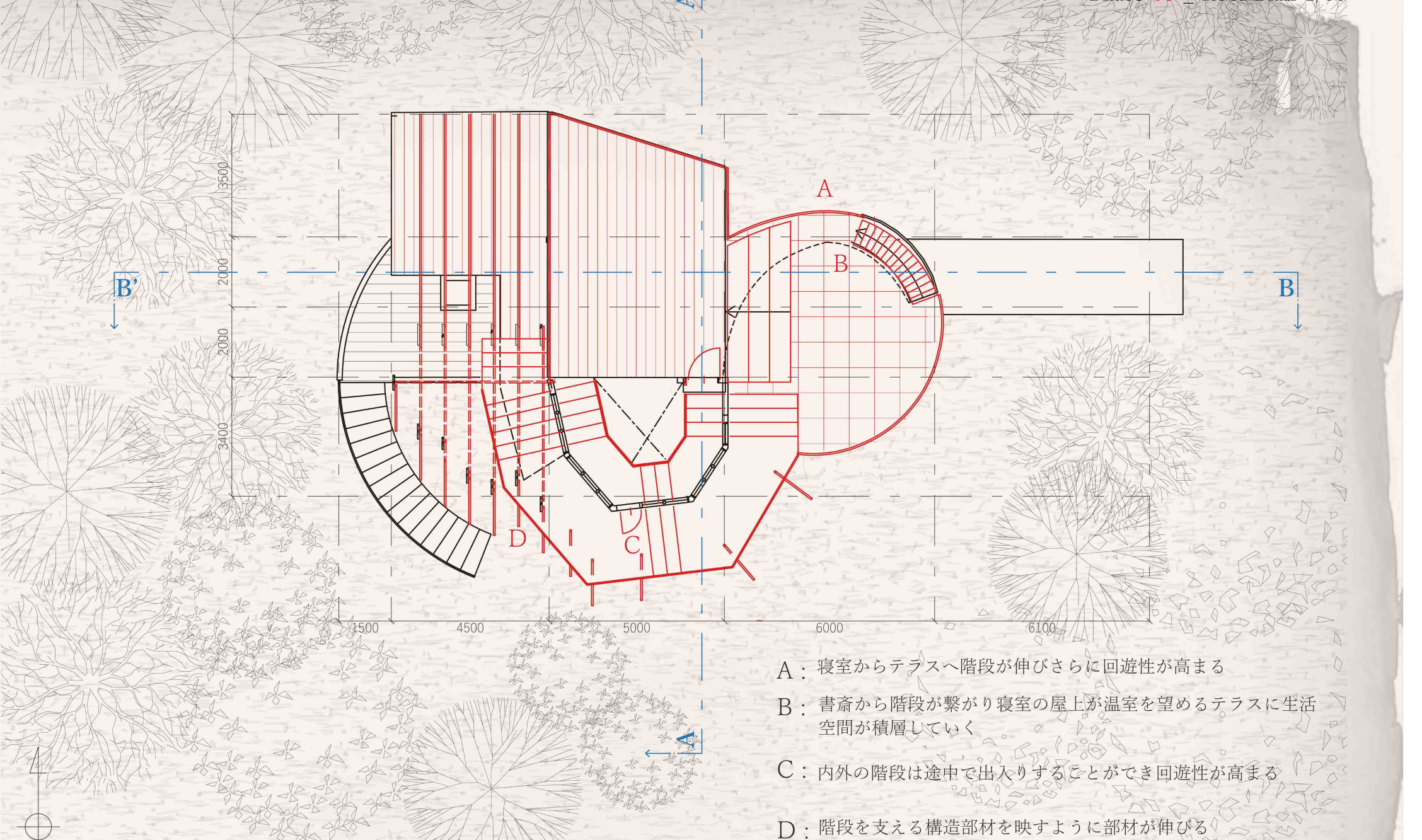
Phase 05

Many Days After…



日常のふるまいが何度も重なって住宅が拡張していく．
仕事へ集中するための気分転換に散歩が欠かせないダーウィンは，住宅を取り囲むようにテラスや階段が立ち上がり，散歩という生活のルーティンが住宅として一体化して取り込まれていく．

「ダーウィンは同じ道を何度も歩くことを好んだ」
「ルーティンを繰り返すことは，ダーウィンの思索に必要不可欠であった」



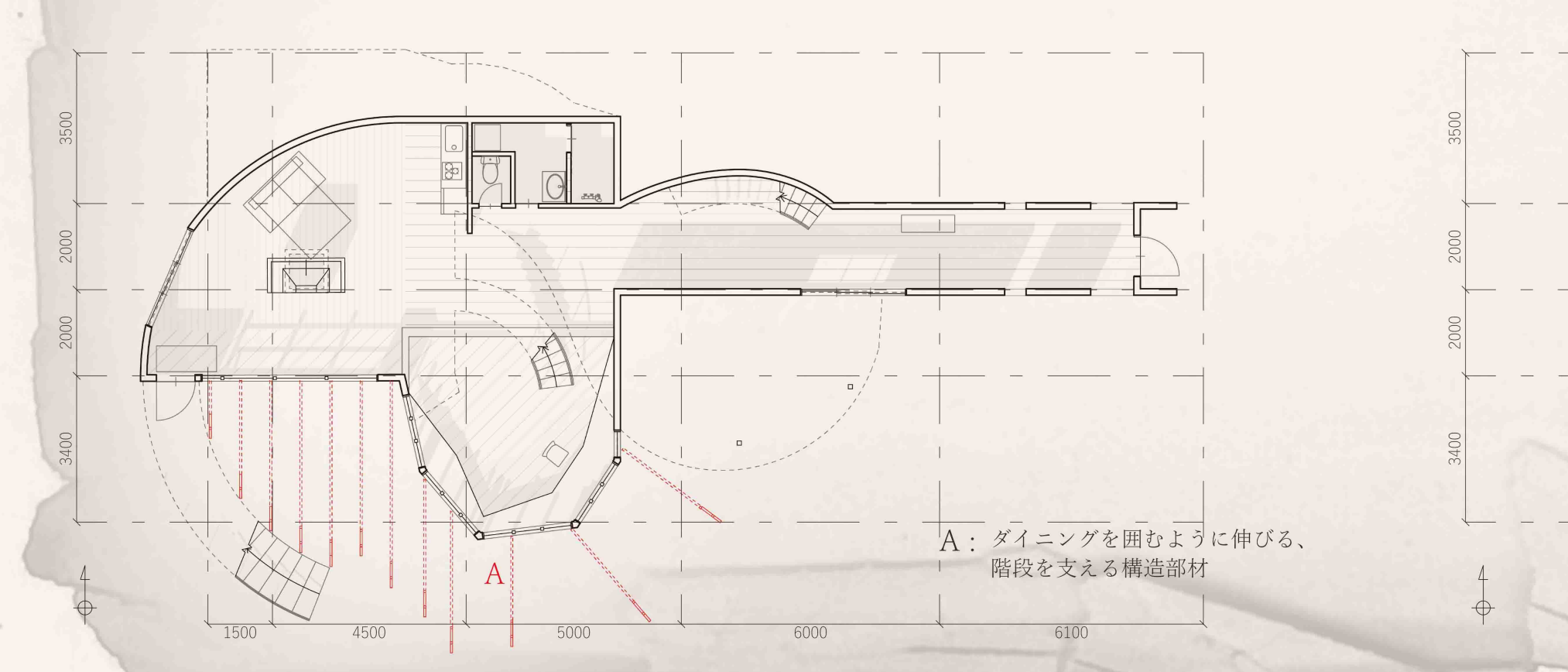
Phase 05 _ Roof Plan 1/80

A：寝室からテラスへ階段が伸びさらに回遊性が高まる

B：書斎から階段が繋がり寝室の屋上が温室を望めるテラスに生活空間が積層していく

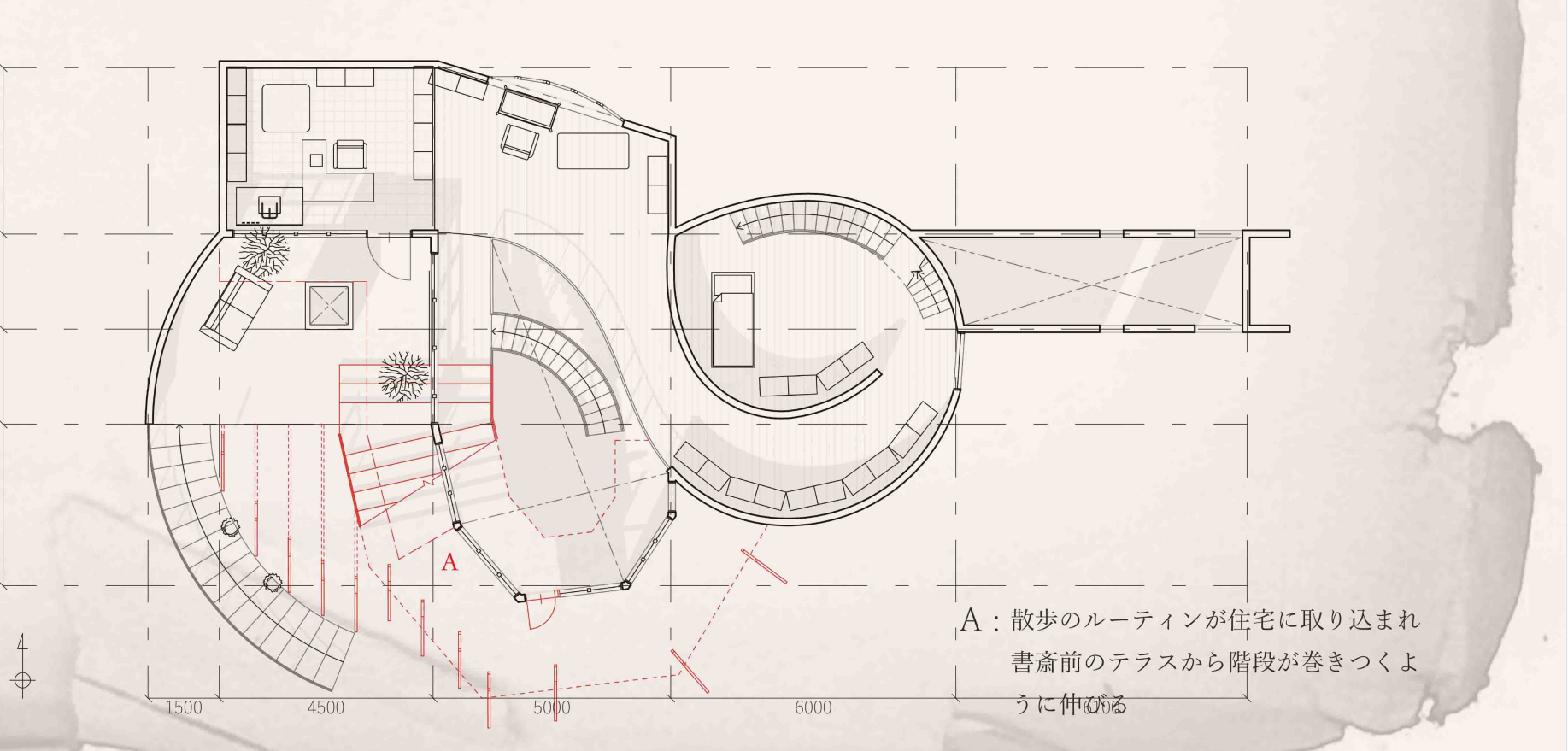
C：内外の階段は途中で出入りすることができ回遊性が高まる

D：階段を支える構造部材を映すように部材が伸びる
やがて書斎前テラスを緑の屋根が覆い空間の表情が変化してゆく



Phase 05 _ 1F Plan 1/80

A：ダイニングを囲むように伸びる、階段を支える構造部材



Phase 05 _ 2F Plan 1/80

A：散歩のルーティンが住宅に取り込まれ書斎前のテラスから階段が巻きつくように伸びる